

なぜメルヘンは死に際にあんなにも敬虔な微笑みを浮かべることができたのか

漆原正雄

むずかしいものなんてあるんだろうか？

ゆっくりとブランコから猿を剥ぎ取りながらぼくは思う

夕暮れがのこぎりで切られるような不自然さで散らばっていく

名駅とまで呼ばれた場所が議論のあとの渴きを欲している

黎明色に輝くバスを見つめながら

猿が饒舌に地図のしわを引き伸ばす

天国を貫いた理由だけが、神聖だ、と言わんばかりに――

たしかに今まで誰も知らない操り人形の図形のなかでうずくまっていた

それは信頼の世界ではもっとも鮮明だったがもうメルヘンは失われてしまったのだ

仕方なく、苔にまみれた一羽の鳥を追う

眼球を捨てることさえうつつらしい

永遠に沈んでいきそうなのに、ぼくは、ぼくが、まだ、いるのを感じる

「はい、将来の夢は、赤でも青でもなく三角でも四角でもない新しいマークを開発することです」

方法だけがあった

昔と同じ方法だけが

東京で方法だけがあった

その方法を夢見て未来をたぐり寄せる幻の方法だけが……

ぼくは明日、派遣先で凍ったまま眠りつづけていることだろう
眠りつづけながらぼくたちは剣をぶつけ合うこともなく豊かに
都市学を学び合う

嗅覚は輝く、そして妖精の庭は消滅する

少しは文明のふりをしてみる！

猿を舐めるとぜつぼうの味がした

夜域

漆原正雄

(ぼくは影を代表する)

きみはもうずっとまえから太陽の町でゆらゆら揺れている
きみが若いかどうかにかかわらず きみは年をとるだろうか？
いまだに自分がこの世のものでないことに気づく余地もなく

「この部屋の本棚の知性が半月ごとに増殖の乗り継ぎで三十年後にはおびただしくも良質な頭脳へと発展をとげますように……」

鍾乳石には語られなかったぼくのおののきが

明かされなかったきみの秘密が

もっとも貴重な絶対の純度である場所から湧く！

土の中の夜は夜の土の中で

その中の夜と土と

土の夜と

夜の土が遠い水の底にある

そして ひと息に飛び立つために 破壊の瓦解性は あかるい

家賃を滞納したままペンギンのバイクを走らせて海の方こうの地下に行く

ぼくのきみの個性の月の柱――

国道二十九号線羊の大渋滞――

金メッキのレタリング・ダンス……金メッキのレタリング・ダンス……金メッキのレタリング・ダンス……

紛失するコンセントそのコンセントの干からびた入門書

食べごたえない砂漠を創造する食べごたえない寝袋あるいは食べごたえない毛羽立った塑像

さびしい冬の夜

青ざめたりアリズムが

ベンチに腰掛けてゆっくりと薬を飲む

(臨時ニュース時の独裁者の鬱鬱鬱劑！)

なまぐさい異常が吐くそれを真似るぼくらの英雄

それを模倣するぼくらのステッキ

連日 蝶番の消えた町に通う子どもたち

『お願いします、しわのないうつくしい湖をこっそりさらってきてください！』

死の舞踏数をかぞえる

すると偽札が派手に舞い上がる

白黒反転に夢の方位を用いて美と似たものに裂け目が吠える

〈ただいま孤独中〉という看板を下げた床屋を横切る

怪鳥はまた今夜も石灰舌所持者を募集する

想像力のない卵の膝を探すが符号しない

雨に濡れた剣がぼくを愚かだという

林立する水母の樹を境にきみの「触」がとまる

ぼくの古典はきみの古典へとしっかり受け継がれるだろうか？

生まれたたのときと同じかたちを思いえがきながら最後の野を散歩しようよ

(涙死するまえに)

記憶の犬

漆原正雄

洗ってもなだめても犬の記憶は走るのをやめない
雪原の表面を 布切れをはがすように
あおざめた幻想の音符のように
製紙工場跡地に吠えることのないしかばねをのこして

*

路傍の観察者のまなざしを無視し、
画廊の絵にいちいち足跡をつけ、
月光を浴びたレンガ塀を飛び越え、
私の無償の行為を花束にして。
私のほほえみに泥を塗りつけて。

*

(おまえはさっさと肖像のなかで眠ってしまいたいと願う
忘却の 砂漠の砂の一粒にあこがれ
これまでのすべての文脈からのがれたがっている)

毛布にくるまっていたころの太陽をふくんだトマトを欲していたこ
ろのシヨパンの幻想即興曲とあるいはピアノの鍵盤とたわむれてい
たころの八月の叡智を信じていたころのほとんどひからびたおまえ
の記憶どの前例にもあてがわれなかったおまえの意識よ――

……

おまえはかたい瓶のふたを開けてくれた

(雨のやむまえに)

おまえはかたい瓶のふたを開けてくれた

(雨のやむまえに)

おまえはかたい瓶のふたを開けてくれた

(雨のやむまえに)

おはよう、とかわしあったときからすでにおまえはしかばねの夢を
見ていたのだ

(日々生まれ変わることにへの恐怖心に打ち勝ち紅蓮の炎をまとった
ふりをして)

しかしおまえの散文の方向性は私の精神よりもうつくしい

おまえは私の可能性をやさしく育んだが

私はおまえの「青の破片」を踏むのをおそれた

いくども調律をくりかえした

「親密の構図」

はやがてばらばらに分解されるだろうが

*

記憶は骨のようにかたく

血のようになめらかだった

*

そしてそのとき私はもうおまえのことなど忘れてしまっている